届きにくい支援策

「盲ろう者」全国に1万4000人

初の本格調査 県内は204人

目と耳の両方が不自由な「盲ろう者」は、国内で少なくとも約1万4千人に上ることが、初の本格的な実態調査で明らかになった。盲ろう者は外出などにも支援が必要な場合が多く、社会との接点が持てず、孤立しがちな現状がある。

「ヘレン・ケラーは有名ですが、日本の当事者の実態はほとんど知られてきませんでした」。社会福祉法人「全国盲ろう者協会」（東京）の山下正知事務局長は話す。

調査は厚生労働省の事業として同協会が2012年に実施、今年結果が報告された。報告書によると、視覚と聴覚の両方の障害が身体障害者手帳に記載されている人は、12年10月で1万3952人で県内は204人。65歳以上は全体の8割近くを占める。

一口に盲ろう者といっても、障害に至った経緯や程度は人それぞれでコミュニケーションの方法も異なる。例えば「指点字」と呼ばれるのは、盲ろう者の指を点字タイプに見立てタッチして言葉を伝える方法。「触手話」は手話をする人の手に触れて、その動きや形から内容を理解する。

手話に触れて形から内容を読み取る「触手話」で情報交換する盲ろう者たち＝大阪市の「視聴覚二重障害者福祉センター すまいる」

社会参加へ民間団体も協力

盲ろう者が社会参加するには、そうした独特の方法で通訳したり、移動を補助したりする「通訳・介助員」の存在が欠かせない。各都道府県がその派遣事業を行ってきたが、実態調査のデータから推計した事業の利用率は6・9%にとどまっていることが分かった。「各県の予算が限られている上、本人に支援サービスの情報が届いていない。結果的に多くの人が家でひっそり引きこもっている」と山下事務局長。

そうした当事者をつなげる意義は大きい。NPO法人「視聴覚二重障害者福祉センター すまいる」（大阪市）では毎週、情報交換イベントが開かれている。

「最近、話題になっているニュースを紹介してゆきますね」。司会役の女性が話し始めると、盲ろう者と2人一組になったボランティアが、その言葉を逐一、触手話で通訳していく。参加者からは時折笑い声が漏れ質問も出る。すまいる代表で盲ろう者の門川紳一郎さんは「ここへ来て同じ境遇の人がいることを初めて知り、生き方が変わる当事者は少なくない」と話す。

県内では北信地方で、盲ろう者を支援するグループ「ながの盲ろう者りんごの会」が活動。障害のある3人を含む約40人が参加し、交流会や学習会、レクリエーションなどを企画している。

事務局長の堀口寛美さん（48）は「盲ろう者が社会に出るには、周囲の協力が欠かせない。盲ろう者について多くの人に知ってもらえれば」と話している。問い合わせは、同会事務局（☎026・268・0666）へ。

「通訳・介助員」頼みやすい制度を

都内の女性 引きこもり経て働く

東京都の村岡美和さん（41）は生まれつき両耳がまったく聞こえず、28歳のとき病気で視力が徐々に落ちた。「家に引きこもった時期もあった」が、いまは社会福祉法人「全国盲ろう者協会」の職員として働いている。

わずかに残る視力では、太字のペンで10円玉大に書いた文字なら読めるが、視野が極端に狭く「トイレットペーパーの芯よりも細い筒からのぞいている感じ」という。

毎朝、振動で時刻を知らせる時計で起床。手の感覚を頼りに身の回りのことは自分でこなす。水道の蛇口や冷蔵庫の扉をうっかり閉め忘れても気づかないが、料理は趣味の一つだ。「香りの情報は早くつかめるので、食べることが好きな盲ろう者は結構います」

通訳・介助員から品物の説明を受けながら、スーパーで買い物をする村岡美和さん（右）＝東京都新宿区

室内では天候が分からず自宅を出て初めて雨や風に気づくが、1人で白杖を手に電車で通勤する。事務作業はパソコンの文字拡大ソフトを使い、他の職員らとの会話では「弱視手話」と呼ばれる視力に配慮した方法の手話を使う。盲ろう者向けの「通訳・介助員」を養成する講習会が各地で開かれており、月数回は通訳・介助員とともに出張し講師を務めている。

一番の不安は病気。自分では119番できず、夜は通訳・介助員も呼びにくいため、健康管理に神経を使う。「いつでも通訳・介助員を頼めるような制度ができること」が村岡さんの夢だ。

私の声

タンポポの綿毛のよう

5月13日付の本欄「味は受け継いだからね」を読んで、すぐに飛び付きました。かねて赤飯好きの家人のために、手軽におこわを炊ける方法を思案していたからです。

最初は試しに3合、書かれている通り忠実に炊きました。小豆が少し硬く、赤飯は少々軟らかめだったけど、案じたよりうまくできました。

これはいけるとばかり、次は米5合、小豆は一晩水に浸してからポットに入れ、もち米は洗って1時間ほど水切りしました。

熱湯の余熱を利用し、省エネルギーで手間も省ける工夫に驚きました。そのセンスの良さに敬服すると同時に、それをきちんと受け継ぎ、発表してくれた投稿者の方にお礼を申し上げます。

思いがけず積年の願いがかない、料理のレパートリーも増えました。お金に入れる熱湯は慎重に少し減らしたら、大成功。香りも食感も、蒸した赤飯に勝るとも劣らぬ立派なものです。早速仏壇と神棚に供え、隣にも分けた。

早速友人に伝えて喜ばれました。きっと他にも私のようにされている方がいるかもしれません。こんなふうにして文化は広がり、続いてきたのかもしれないと、遅まきながら実感しています。

タンポポの綿毛のように、投稿した方のお母さんの知恵が、あちらこちらに広がり、根を張り、私たちの生活を楽しく、豊かにしてくれることでしょう。

（小林百合江・81歳・上田市）

くらし応援

ゆーすたいる ファッション編 ②

「脱毛男子」

ひげの脱毛を決意したのは、大学3年の冬だった。「今のうちにとっちゃった方がいいのかな」

東京・渋谷のサロンで施術した。「鼻毛を抜くくらい」に痛かった。以来2年、埼玉県久喜市の会社員細田翔太郎さん（23）は、今も手入れを続けている。かかった費用は約40万円。脱毛後3日間は、専用の化粧品を使って肌を冷やしてケアする。「痕になったらいけないから」

ひげが濃く、ほお周辺はそっても青みが残った。「めっちゃ濃い。それがフツーに嫌でした。老けて見えるのも嫌。女性は老けてみられるのが嫌ですよね？ それと同じ感覚」。若く見られたいし、年は取りたくない。

「ひげは男らしさと関係ない。年のわりに若く見える、と言われる方がいいです」という細田翔太郎さん＝東京・汐留（撮影・小野啓）

洗練された外見 武器に

ファッションで影響を受けているのは、同い年のモデルだ。金髪で中性的、透明感がある。脱毛は、おしゃれとも「リンクしている」という。

平日は細身のスーツ。休日はモード系のモノトーンの服で、足元はワークブーツで少し「外す」。脱毛後、顔色が明るくなり、肌がきれいと言われた。服がさらに似合うようになったと思う。

エステ店を展開するTBCによると、男性の脱毛の需要は「ここ2、3年で急激に高まっている」という。ひげだけでなく、夏場に露出するすねや腕にも気を配る。

「時代が求めるものも変わっているんじゃないですか？ 中性的な男が好きな女の人も増えていると思う」と細田さん。でも「中身はめっちゃ男らしくありたい」のだ。「とりあえずお金をガンガン稼ぎたい。第1目標は起業です。営業力も身に付けたい」

そのためにも洗練された見た目は、武器だと思っている。フェイスブック、ツイッター。イメージ付きで発信する時代には、外見は自分というブランドを作る大事な要素だ。一昔前のカリスマ経営者を尊敬しているが「なんであんなに外見に無頓着だったんだろう」。

〈月曜日に掲載〉